

柔軟に、そして安全に —— PowerCMS クラウドの内側

安心・安全にご利用いただくための PowerCMS クラウドの取り組み

ウェブソリューション担当兼クラウドエンジニアリング統括 三浦貴之



アルファサード 株式会社

PowerCMS クラウドとは(標準機能)

Microsoft Azure 上の環境に、最適化済みの PowerCMS を SaaS としてご提供

24時間365日の有人監視

有人体制で障害の一次対応を行います。
解決できない場合も、スタッフがベストエフォートで対応します。

OS・ミドルウェアの更新

パッチとセキュリティ・アップデートを日次で取得。リファレンス環境で確認のうえ、週次で適用します。

ステージングサーバー機能

パブリッシュしたファイルをステージング領域へ、さらに本番領域へ同期できます。

日次バックアップ

すべてのサーバーで夜間に日次バックアップを実施。管理画面から任意タイミングで取得・復元する機能はオプションです。

管理画面からの各種設定

バーチャルホスト管理、環境変数設定、プラグインの有効化、SFTPパスワード変更。

PowerCMS の全機能をそのまま

クラウド版でも機能に違いはありません。
PowerCMS 8341 や PowerSearch もすぐに使えます。

※ いずれも基本プランに含まれる標準機能です(2026年7月時点)

選んで追加できる、サービスオプション

セキュリティを強化する

- ・WAF 導入(プロキシ型。持ち込み証明書に標準対応)
- ・WAF 月次レポート作成/証明書取得代行
- ・PowerCMS Security(マルウェア対策・IPS/IDS・変更監視)

配信を強く、分散する

- ・CDN(Azure Front Door Standard・500GB/1TB/4TB)
- ・フロントサーバー(Linux)—— 公開側とCMSを分離
- ・10インスタンスまでスケールアウト可能

リソースを増やす

- ・短期スペック増強(日額・イベント時の一時増強)
- ・SSD 512GB への変更(1台構成)
- ・データ転送量の定額上限引き上げ

運用を補強する

- ・バックアップオプション(管理画面から任意タイミングで取得・復元)
- ・メール送信数追加/メール送信機能強化(送信元IP専有・SPF/DMARC/DKIM)
- ・DNSサービス/DNSレコード修正

※ 2026年7月時点のオプションプラン。必要なものだけを選んで追加できます(価格・詳細は公式サイトをご参照ください)

PowerCMS クラウドのサービス3階層

料金表・機能一覧に掲載

標準機能

ステージング同期・24/365監視・日次バックアップ 等

契約に含まれる

サービスオプション

WAF・CDN・PowerCMS Security 等

選んで追加

実は、こんなこともやっています

個別対応 お客様の環境に合わせた作り込み

本日のテーマ

メニューに載っているのは、上の2階層まで。3つ目の「個別対応」が、本日のテーマです
では、なぜ「個別対応」ができるのか？

世の中のCMSサービス:4つの提供形態

1 マルチテナントSaaS

環境:共有・標準化 / 運用:サービス提供者

共有環境で標準機能を提供。すぐ使えて低コスト、アップデートも自動。サーバー設定には触れない前提の設計です。

2 ヘッドレス / API型

環境:提供者が管理 / 運用:公開面は利用者

コンテンツ管理に特化し、公開サイトは利用者側で開発。CDN等で配信します。フロントエンド開発の体制が前提です。

3 コンテナ型PaaS(DevOps型)

環境:コードで定義 / 運用:利用者(開発チーム)

Docker / Kubernetes 上で動かし、必要なサービスを設定ファイルで定義。Git連携でデプロイします。自由度は高い一方、環境の設計・運用は利用者側の責任です。

4 シングルテナントSaaS

環境:お客様専用 / 運用:サービス提供者(有人)

専用環境をベンダーが構築・運用し、お客様の環境や運用に合わせた個別対応を行います。メニューにない対応も、環境ごとに引き受けます。

→ PowerCMS クラウドはこの形態です

※ このほか IaaS 上に自社構築する形態もあります。中間的なサービスも存在するため、考え方を整理するための大まかな分類です

2つの軸で見る:環境の自由度 × 運用の担い手



横軸:CMSが動くサーバー・ミドルウェアをどこまで作り込めるか / 縦軸:インフラ運用の作業を誰が担うか

※ どの位置が優れているという図ではありません。体制や要件によって、適した位置が変わります

本日ご紹介する3つの切り口

1

クライアント公開環境との連携・同期

お客様所有のサーバーや AWS S3 への配信、ディレクトリ/ファイル単位のきめ細かい同期

2

サーバーの個別チューニング

Apache MPM・ワーカー数・cron・アップロード上限・リバースプロキシまで、ミドルウェア設定の作り込み

3

移行・アップグレードへの柔軟対応

止めない切替(並行稼働・差分反映・TTL調整)、EOL対応、インフラ刷新

各系統を「よくあるご要望 → 実際の対応例」のセットでご紹介します

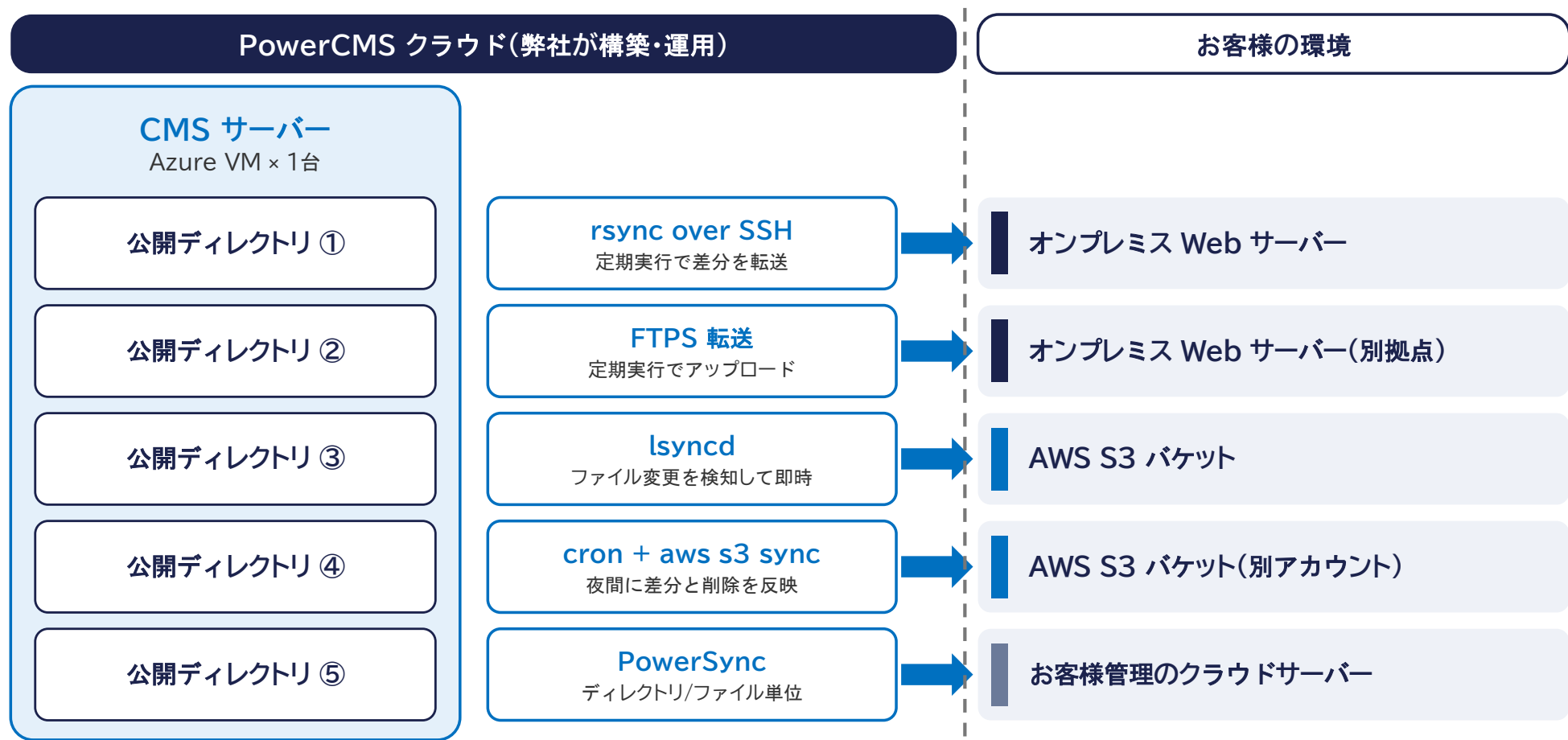
① クライアント公開環境との連携・同期

標準のステージング→本番同期に加え、「CMSはクラウド／公開先はお客様環境」という分離構成も組めます

よくあるご要望	実際の対応例
自社で運用している公開サーバーへ配信したい	CMSサーバーから、お客様所有のサーバーや AWS S3 への同期を個別に設定
もっと細かい単位で同期したい	PowerSync でディレクトリ/ファイル単位のきめ細かい同期に対応
本番の内容を開発環境へ戻したい	本番環境から開発環境へのコンテンツ反映(切り戻し)にも対応
CMSと公開先を分けてセキュリティを高めたい	フロントサーバーオプションを土台に、CMS環境(Azure VM)と公開環境(Azure App Service)の分離構成を個別に設計

※ サービスオプションを土台に、構成・設定・実施は環境ごとに個別対応します

【事例①】1台のCMSサーバーから、5つの公開環境へ



※ 実際の事例をもとに簡略化しています。公開ディレクトリは仮想ホストごとに分かれており、同期の設定はそれぞれ独立しています

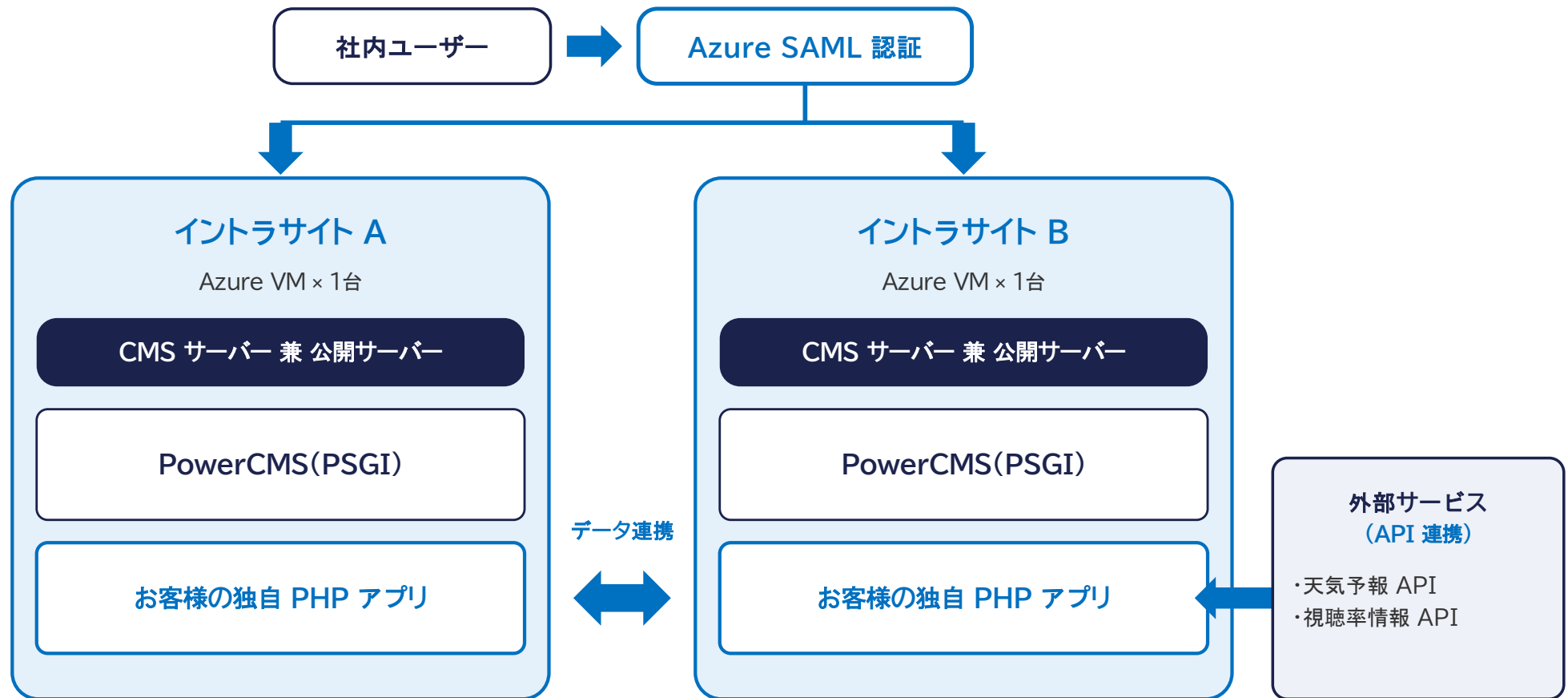
1台のCMSサーバーから、5つの異なる公開環境へ。同期の仕組みは、5つとも別々です。
決まった「型」に合わせるのではなく、環境ごとに設計しています

② サーバーの個別チューニング(作り込み)

専用環境だから、ミドルウェア設定レベルまでお客様ごとに調整できます

よくあるご要望	実際の対応例
アクセス特性に合わせて処理を最適化したい	Apache MPM の変更、PSGI ワーカー数の変更
定期処理を組み込みたい	全体再構築や動機処理のcron の設定変更、外部システムへの連携
独自のアプリを利用したい	ユーザー自前のPHPアプリケーション運用
公開経路に独自の制御を入れたい	リバースプロキシの設定 コンテンツに応じて、処理をするサーバーを分ける

【事例②】 2つのイントラサイトと、お客様の独自アプリ



※ 実際の事例をもとに簡略化。独自アプリはお客様が開発され、PowerCMS(PSGI)と同一サーバー上で動作します。その実行環境の設計・構築は弊社が担当しています

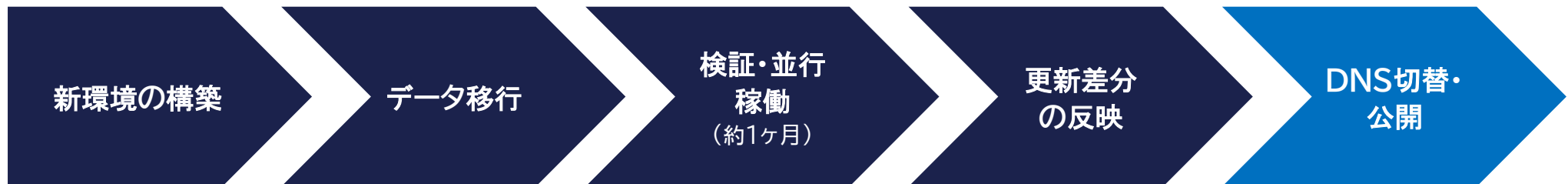
1台のサーバーが CMS と公開を兼ね、その上でお客様の PHP アプリまで動いています。
実際の環境では、複数の切り口が重なり合います

③ 移行・アップグレードへの柔軟対応

これまでの実績がいちばん豊富な領域。移行は”一発勝負”にしません

よくあるご要望	実際の対応例
既存環境から乗り換えたい	オンプレ環境・他クラウド環境からのデータ移行
止めずに安全に切り替えたい	並行稼働(約1ヶ月)+差分反映+DNS切替で伴走
カスタマイズ、独自のアプリも移行したい	独自に開発したプラグインや、PHPアプリなどの移行
既存環境へのアクセスから全部お任せしたい	現状調査、データの取得から一気通貫で対応

③ 止めない切替の進め方



並行稼働 約1ヶ月

新環境と旧環境をおよそ1ヶ月並行稼働。その間にお客様に新環境で検証いただき、切替直前に更新差分を反映します。

DNS切替

切替前に TTL を 86400秒(1日)→ 300秒(5分)へ短縮。万一問題が起きても、約5分で切り戻せます。

段階的公開にも対応

移行検証中はサイトを限定公開にし、本番切替のタイミングで一般公開へ。検証と並行稼働でリスクを潰します。

整理:4つの形態と、向いているケース

提供形態	個別対応の考え方	向いているケース
① マルチテナントSaaS	標準機能の範囲で完結。カスタマイズしない前提で、シンプルさ・低コスト・自動更新を実現	標準機能で要件が満たせる運用をシンプルにしたい
② ヘッドレス / API型	コンテンツ管理に特化。公開面の作り込みは利用者側の開発で実現	フロント開発の体制やパートナーがある
③ コンテナ型PaaS (DevOps型)	環境をコードで定義でき自由度は高い。設計・チューニング・運用の責任は利用者側	社内に DevOps・インフラ運用の体制がある
④ シングルテナントSaaS (PowerCMS クラウド)	サービスの側がお客様の環境・運用に合わせ、設計から作業まで有人で実施	環境・運用・移行に固有の事情がある運用体制を自社で抱えたくない

「お客様が、型に合わせる」か。「サービスが、環境に合わせる」か。

いずれの形態にも利点があります。環境や運用に固有の事情があり、運用体制は自社で抱えたくないサイトほど、④が活きます

最初から、この形だったわけではありません

① 出発点

標準的なホスティングとして

2015年12月のサービス開始当初は、PowerCMS を安定して動かすための環境を、決まった構成で確実にお届けする。それがサービスの中心でした。標準化されていて、迷いのない仕事です。

② 迷いながら

引き受けるか、断るか

ご要望が来るたびに、選択を迫られます。引き受ければ、標準から外れる。手順が増え、事故のリスクも、属人化も増える。正直に言えば、断ったほうが楽です。けれども断れば、そのお客様の運用は止まってしまう。そのたびに迷いながら、引き受ける側を選んできました。

③ 結果として

ご要望が、形をつくった

いまの形をつくったのは、私たちの構想ではなく、お客様の必要でした。何年ものあいだ、寄せられたご要望に一件ずつ向き合ってきた。そのまま形になったものが、いまのサービスです。

戦略でも、設計でもありません。
一件ずつ迷い、それでも断らなかったことの積み重ねが、結果として、いまの形になりました

なぜ、ご要望は生まれ続けるのか(CMS運用の特性)

1 サイトは「作って終わり」ではない

構築より、運用の期間のほうがはるかに長く続きます。その間に、OS・ミドルウェアのサポート終了、証明書の有効期間の短縮、新たな脆弱性——「必ず来る変化」が訪れます。

2 企業サイトは、単独では存在しない

既存の公開サーバー、社内ネットワーク、他システム、社内の承認フロー。CMSだけを新しくしても、まわりの事情は変わりません。

3 要件は、使い始めてから出てくる

契約時にすべてが見えていることはありません。ご要望の多くは、運用が始まってから、事業や体制の変化とともに生まれます。

4 インフラの専任者がいるとは限らない

情報システム部門は他業務と兼務。制作パートナーは、サイト制作に集中したい。「機能はあります」だけでは、結局どこかで誰かがインフラの作業を担う必要が残ります。

「メニューにある機能」でも、「ご自由にどうぞ」でも埋まらない”すき間”が、運用の現場には必ず残ります

すき間は、なくなる — 移動するだけです

どの形態を選んでも、すき間は消えません。行き先が変わるだけです

① マルチテナントSaaS

お客様の「諦め」へ
できないことは、できない

② ヘッドレス / API型

お客様の「開発工数」へ
できる。ただし、毎回つくる

③ コンテナ型PaaS

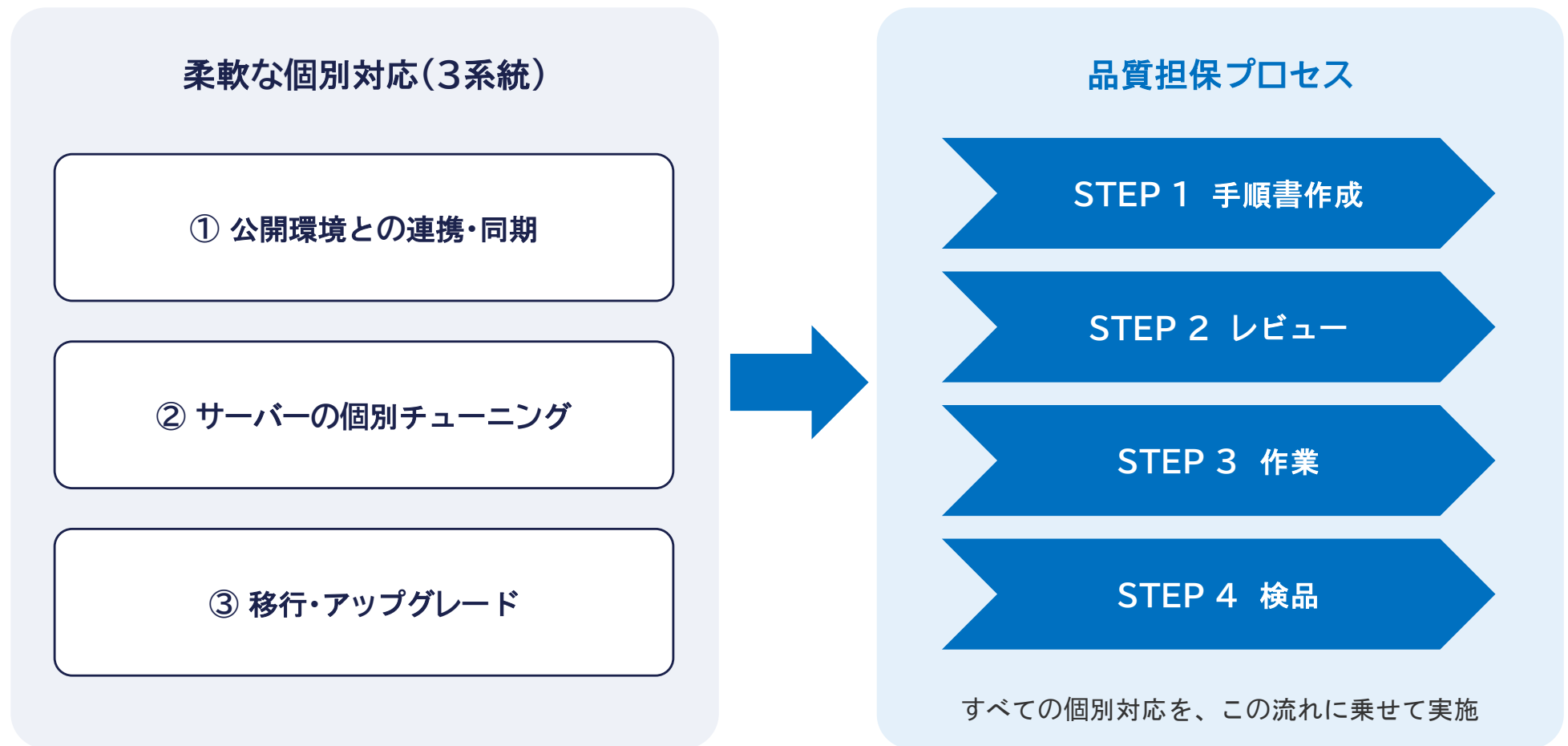
お客様の「運用責任」へ
できる。ただし、負債として溜まる

④ シングルテナントSaaS

私たちの「作業量」へ
消えたのではなく、私たちが引き受けています

問いは「すき間があるか、ないか」ではありません。
そのすき間を、「誰が引き受けるか」です。

柔軟さは、「仕組み」で支えています



この4つのステップを、具体的にご紹介します

作業の「前」:手順書をつくり、他人の目を通す

STEP 1 手順書作成

- ・テンプレートがあるものは複製し、環境や課題番号を差し替えて作成
- ・コマンドまで書く。実行する人が判断に迷わない粒度まで具体化
- ・各ステップに「確認ポイント」と「期待値」を明記
- ・ロールバック手順も、必ずセットで用意する

STEP 2 レビュー

- ・作業者以外が、手順書の内容を確認する
- ・一次チェックと最終チェック、二段階の確認を経る
- ・手順書の冒頭に、レビュー状況(誰が・いつ・どの課題で)を明記
- ・レビューが完了するまで、本番環境には触れません

事故の多くは、作業中ではなく「準備」で決まります。
だから、本番環境に触れる前に、必ず作業者以外の目を通します

作業の「最中」と「後」:戻せる状態で進め、突き合わせる

STEP 3 作業

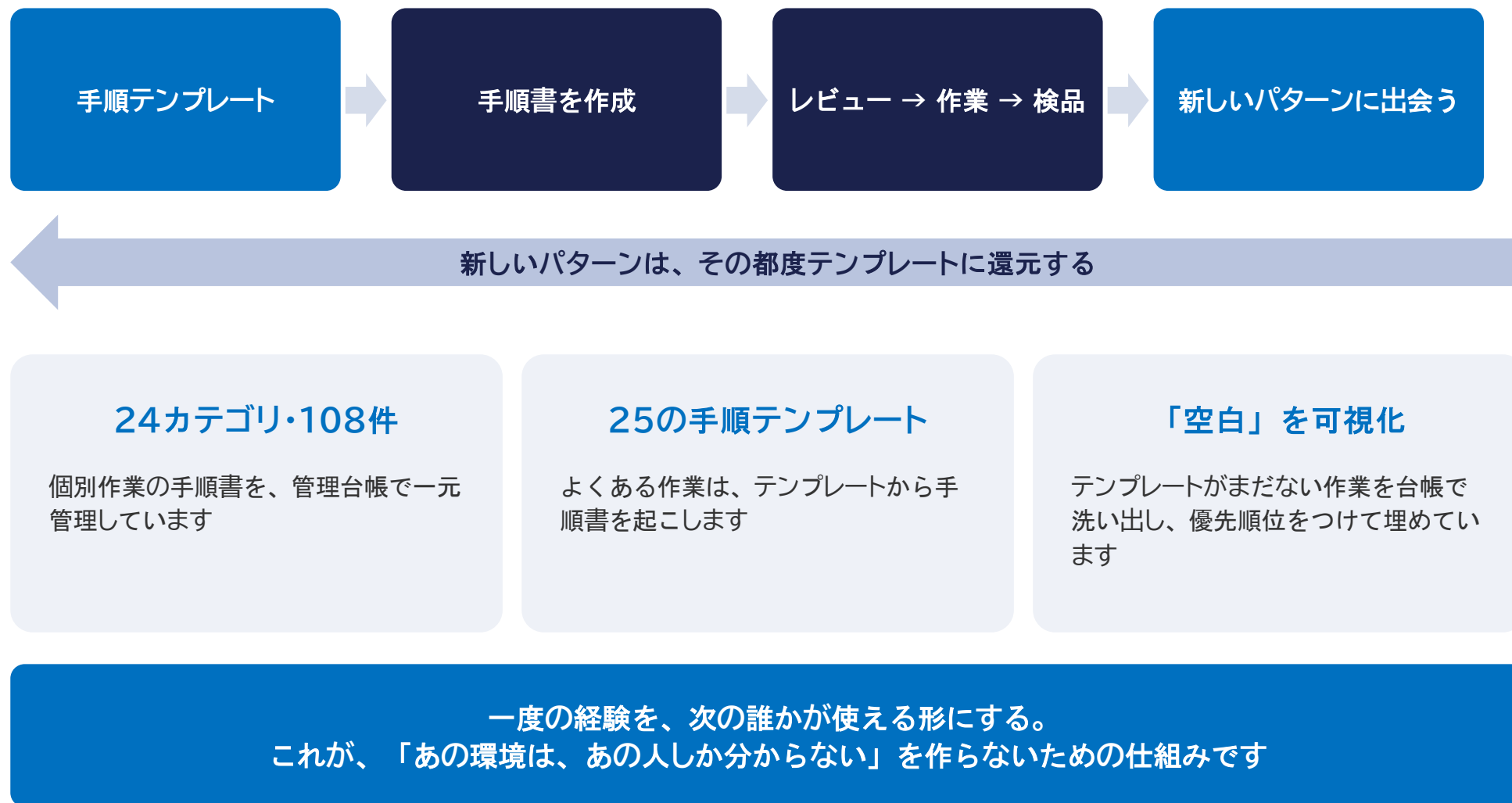
- ・変更する設定ファイルは、作業前にバックアップを取得
- ・作業による誤検知を防ぐため、監視アラートを事前に抑止
- ・死活監視を回しながら作業(1秒間隔でサイトとDBの応答を確認)
- ・設定は構文チェックを通してから反映。反映後に稼働状態を確認
- ・判定基準は事前に決める(正常応答が継続/エラー増加なし等)

STEP 4 検品

- ・検品の手順も、テンプレート化しています
- ・データ移行なら、移行元と移行先を項目ごとに照合(バージョン、仮想ホスト、環境変数、記事数、ページ数、アイテム数...)
- ・環境構築なら、お申し込み内容とスペックを突き合わせ(CPU・メモリ・ディスク・リージョン・バックアップ・監視設定)
- ・異常があれば、用意したロールバック手順で元に戻す

「たぶん大丈夫」を、「確認済み」に変える。
作業しっぱなしにせず、結果を一項目ずつ突き合わせます

仕組みは、育て続けています



まとめ:柔軟さと品質担保は、セットです

有人対応につきまとうリスク

PowerCMS クラウドの答え

品質がばらつく

作業は必ず手順書に落とします。よくある作業は25の手順テンプレートから起こし、粒度と確認項目を揃えます

事故が起きる

作業前のバックアップ、作業者以外による二段階レビュー、構文チェック、死活監視を回しながらの作業、そして作業後の検品。異常があれば、用意したロールバック手順で戻します

属人化する

新しいパターンは、その都度テンプレートに還元。24カテゴリ・108件の手順を管理台帳で一元管理し、誰が担当しても同じ品質で作業できる状態を保ちます

柔軟にお応えできるのは、それを支える仕組みがあるからです。
埋められないすき間、安心してお任せください。